

森信三の全一学と実践 (2)

山 田 修 平

Shuhei YAMADA : The Total Philosophy and Practices of Nobuzoh Mori (2)

鳥取短期大学研究紀要 第63号 抜刷

2011年6月

## 森信三の全一学と実践 (2)

山 田 修 平

Shuhei YAMADA : The Total Philosophy and Practices of Nobuzoh Mori (2)

「全一学とは、この大宇宙に秀満する絶対的全一生命の自証の学をいう。」<sup>1)</sup>「全一学とは、各自がそれぞれの全一生命より与えられ、二度とくりかえし得ないこの地上の生において、自ら授かった性質を、いかにして発揮し実現して御旨に応うべきかをまなぶ学といってよい。」<sup>2)</sup> 森は世界観と人生観統一の学としての自らの哲学を、80歳を越えてから「全一学」と称した。森の著作を紹介すると共に、森の学問を特徴付ける心実学、さらに全一学の形成過程を追い、その特質を考察する。

キーワード：心実学 民族性 具体的実践性 体系性 易簡性 全一学

### はじめに

前稿<sup>3)</sup>で森の歩んだ道を、出会い、逆境をキーワードに『自伝』を紐解きながら辿った。森の体験の源泉を読み取り、人間に触れ、その鼓動を聞くことにより、森の学問＝全一学の背景を考えたいと思ったからである。

本稿では、まず、前稿から森の学問に影響を与えた人々また事柄を整理すると共に森の著作を示す。その上で学問の展開過程を追い、全一学の成立とその特質を考察する。

### 1. 森の学問に影響を与えた人々、事柄

人は多くの人々に出会い、様々な事柄を経験する。出会い、経験には一般的にみて正の側面もあれば負の側面もある。正の側面を感謝して受け取り、負の側面をバネにして自己形成を為しうるかが、その人の真価ともいえよう。

まず森の学問形成に影響を与えた人、事柄という視点から、前稿の「森信三の歩んだ道」をもとに、整理しておこう。

### (1) 生い立ち

信三は2歳の時に貧しい小作農の森家に養子に出される。辛い試練であったが、他方、養父母の庶民の善意と律儀さ、素朴さに育まれていく。森の学問の基底にある庶民性はこのためともいえる。

### (2) 中学進学への挫折と岡田虎次郎

森は、尋常小学校、高等小学校の成績は常に首席であったが、経済的な理由のため中学校進学は断念せざるを得ず、師範学校への道を選ぶ。しかも年齢要件があるため、年齢が達するまで、母校で用務員の仕事の手伝いをする。辛い試練であったが、その時代に岡田式静座法の創始者岡田虎二郎を知る。この静座法が森の常に「腰骨を立てる」生き方に繋がっていく。

### (3) 三浦渡世平と三浦修吾

愛知第一師範学校では校長の三浦渡世平の風格と実践的な教育者を養成する教育に影響を受ける。小学校赴任時代に三浦修吾の『学校教師論』を読む。宗教を背景にしながら、宗教の臭みや形骸を感じさせず「人生の生き方」を貫いている三浦の「教師論」に感銘を受ける。その後の森の「教育論」、「教師論」

に多大な影響を与えた実践的教育者二人との出会いである

(4) 福島政男, 西晋一郎, 西田幾多郎

広島高等師範学校時代, 福島政男と西晋一郎に出会う。福島を通して親鸞, ペスタロッチへ森の眼は開かれていった。また西の「倫理学」の深遠さに触れると共に, 西の影響もあって中江藤樹に導かれていく。

京都大学では「善の研究」で著名な西田幾多郎に師事し, 生きた生命の論理から生み出される「哲学」の本質を学ぶ。

(5) 在野の思想群

大学で学ぶ傍ら森は在野の思想家, 実践人ともいえる沢木興道, 福田武雄夫妻等と交流を深め, 彼等を通して宮崎童安, 伊藤証信, 新井奥遂等を知る。その延長上で道元, 慈雲, また江戸時代の実践的思想家—二宮尊徳, 中江藤樹, 石田梅岩等—に一層傾倒していく。

一方で西田幾多郎に象徴される京都大学「哲学科」というアカデミックな世界, 他方在野の実践的思想が森の学問の土台となる。

(6) 『二宮翁夜話』

森は二宮尊徳の『二宮翁夜話』の冒頭の一文「…天地をもって経文とする…」に出会い「真理は現実のただ中にある」。さらに「人生二度なし」という学問的開眼を得る。31歳の頃である。

(7) 建国大学赴任と敗戦, 浪人時代

森は42歳から7年間建国大学で勤務するが, この間は大学運営, また講義が中心で研究はすすんでいなかったように推察される。満州で敗戦を迎え, 死線乗り越え, 帰国後, 敢えて職に就かず自省の日々を送る。その後祖国再生の思いから科学雑誌を出版するが, 莫大な借財を抱え込み, 苦難に満ちた日々を送る。人生の深淵を味わった時期である。

(8) 神戸大学教授時代

篠山農業大学校講師時代を経て, 56歳の時, 神戸大学教授に招請される。処を得た森は定年までの7年間, 大学の講義(教育)と著述(研究)と講演行脚(旅)を3つを柱に, 充実した日々を送った。

(9) 神戸大学定年退職後

63歳で神戸大学を定年退職後は, 全国講演行脚, 執筆, 実践人の家が森の活動の中核となる。

執筆は研究の集大成であり, 全国講演行脚と実践人の家は教育と研修, そして人と人の絆づくりといえよう。

こうして振り返ると, 森の学問は人生のおおむね半ばにあたる30歳代に土台が形成され, 幾多の苦難を乗り越え, 60歳前後に充実し, 70歳代以降に集大成され, 80歳の頃全一学の提唱となる。

2. 森の著作

森の主な著作は『森信三全集』及び『森信三全集続篇』に収録されている。『森信三全集』は1965(昭和40)年6月から1968(昭和43)年8月にかけて実践社より全25巻が刊行されている。また『森信三全集続篇』は1982(昭和57)年11月より1984(昭和59)年9月にかけて実践人の家より全8巻が発行されている。

ここでは『全集』及び『続全集』の収録された主な著作を, 著書名, 著作年, 著作時の森の年齢, 全集・続全集の収録巻の順で示す。

1) 哲学序説	1932年	33歳	全集1巻
2) 恩の形而上学	1938	39	1巻
3) 学統論	1939	40	1巻
4) 実学の再建	1940	41	2巻
5) 学問方法論	1940	41	2巻
6) 修身教授録	1940	44	8-10巻
7) 国と共に甦る	1948	52	11巻
8) われら如何に 生くべきか	1948	52	11巻

9) 新しい時代の教師のために	1948	52	11-12 卷	44) 教頭論	1968	72	22 卷
10) 新しい女性の歩み	1948	52	12 卷	45) 隠者の幻	1968	72	24 卷
11) 人及び女教師として	1948	52	12 卷	46) 森先生との対話	1968	72	24 卷
12) 教育的実践の諸問題	1956	60	7 卷	47) 一問一答録	1968	72	22 卷
13) 国あらたまる	1956	60	11-12 卷	48) わが尊敬する人びと	1968	72	23 卷
14) 教育的世界	1956	60	6 卷	49) 森先生との対話	1968	72	24 卷
15) 学校を生かして動かす者	1957	61	17 卷	50) 幻の講話	1970	76	続全集1-5 卷
16) 日本の方向	1957	61	13 卷	51) ある隠者の一生	1976	79	続全集6 卷
17) 学問の再建	1957	61	2 卷	52) 創造の形而上学	1976	80	続全集1 卷
18) 道徳教育論	1958	62	15 卷	53) 全一的人間学	1976	80	続全集2 卷
19) 道徳教育実践のために	1958	62	15 卷	54) 全一的教育学	1976	80	続全集3 卷
20) 教育者の生涯	1959	63	16 卷	55) 全一学とは何か	1977	80	続全集7 卷
21) 国民教育者のために	1959	63	14 卷	56) 全一学にたどりつくまで	1977	80	続全集1 卷
22) 私の歩いてきた道	1960	63	23 卷	57) 全一的世界	1979	82	続全集4 卷
23) 第二の開国	1960	63	13 卷	58) 情念の形而上学	1980	83	続全集5 卷
24) 理想の小学教師像	1961	65	16 卷	59) 続自伝抄	1984	87	続全集8 卷
25) 理想の中学教師像	1961	65	17 卷				
26) 学校を生かし動かす者	1961	65	17 卷				
27) これからの家庭教育	1961	65	14 卷				
28) 教育的実践の諸問題	1962	66	7 卷				
29) 人生二度なし	1963	67	14 卷				
30) 人間形成の論理	1963	67	6 卷				
31) 女教師のために	1963	67	18 卷				
32) 人間の思考と教育	1963	67	4 卷				
33) 学問の再建	1964	68	2 卷				
34) 学校づくりの夢	1964	68	18 卷				
35) 人生論	1964	68	21 卷				
36) 即物的世界論	1965	69	3 卷				
37) 宗教的世界	1965	69	3 卷				
38) 歴史の形而上学	1966	70	4 卷				
39) 人倫的世界	1966	70	5 卷				
40) 日本文化論	1966	70	5 卷				
41) 読書論	1967	71	20 卷				
42) わかき友への教師論	1967	71	21 卷				
43) 自伝	1967	71	25 卷				

以上のように森の著作は一般的な分野で言えば、哲学、人生論、教育論、国家論等多分野にわたるが、個々の分野のものではなく、大きな枠組みの中で一体化して記述されている。全一学と称せられる所以であるが、ここでは敢えてその内の代表作を分野別にまとめてみよう。

#### 哲学分野

森の学問の核芯部分である。

その代表作は30歳代の『哲学序説』、『恩の形而上学』と69歳、70歳に刊行した哲学五部作の『即物的世界論』、『宗教的世界』、『歴史の形而上学』、『人倫的世界』、『日本文化論』。80歳になって書き上げた全一学五部作の『創造の形而上学』、『全一的人間学』、『全一的教育学』、『全一的世界』、『情念の形而上学』が挙げられる。

#### 人生論

森は学問には自証と化他があるという。哲学分野が自証の中心とするならば、人生論分野は化他の中

心であろう。44歳に著わした『修身教授録』、その延長上にある76歳の時の『幻の講話』が代表作である。

### 教育論

森の場合、教育論は哲学分野と人生論、実践論と一体となって著述されている。従って全一学五部作の中にも先記のように『全一的教育学』等が含まれている。

教育についての著作は60歳に著した『教育的実践の諸問題』、『教育的世界』等多数ある。内容も道徳教育、家庭教育、教師論、女性教師論、教頭論、学校経営と理念的であると同時に具体的、実践的である。

また『学統論』、『学問方法論』、『学問の再建』等学問論の著述もある。さらに敗戦の後、自省の期間を経て『国あらたまる』、『日本の方向』等民族、国家論についても著している。

これらの著作は、先に述べた通り別個のものではなく、大きな枠組みの中で捉えられるものであるが、その中核にあるのが哲学分野であり、なかんずく『恩の形而上学』そして全一学五部作である。

## 3. 森の学問の系譜と特徴

### (1) 心実学という立場

森の学問の特徴は、「民族の学問的伝統を継承しつつ、現代における実学の展開<sup>4)</sup>と位置づけられる。森は自身の学問が実学的色傾向をもつ理由を次のように述べている。「一方では地方で一おうその名を知れた家に生まれながら、幼にして一小作百姓の家に育てられて、つぶさにわが国の、庶民階層の人々の生活苦を知ったこと、しかもこれらと生まれと育ちの違いを、一つに貫くものとして、十五歳のころから今日まで、腰骨を立て通してきたことが、いわば主体的条件といってよいだろう。」<sup>5)</sup>「同時にこのような主体的条件の外にも、客体的条件として、大学に西田幾多郎先生に学びながらも、最後のとこ

ろで一脈の従い得ないものがあり、それは大学卒業後二宮尊徳<sup>6)</sup>に触れることにより、それを触媒として、ついに自らの『開眼』に達した」がその根底には「西田先生に学ぶ以前に教えをうけた西晋一郎先生の人と教えが<sup>7)</sup>ある。西の影響もあって、森は、民族の学問的伝統である中江藤樹<sup>8)</sup>の「心学」、さらにその弟子の熊沢蕃山<sup>9)</sup>が「実学」として展開した道筋を追いながら、「心学即実学」、「実学即心学」、約して「心実学」に辿りつく。森は「心実学の結実」は二宮尊徳だという。

そして「そのような民族における実学的伝統に汲みつつ、それを西、西田両先生の論理を媒介として、主として教育を『場』として展開してきたということは、人生の首途を一小学教師として出発したわたくし自身の宿命によるわけである。」<sup>10)</sup>と述べている。

こうして森は「西洋風な『哲学者』、『倫理学者』、『教育学者』という分類には、その何れにも当てはまらない人間」であり、「今や新たな形態における『心実学』という椅子こそ、まさしく『天』がわたくしのために用意しておいてくれた唯一の椅子<sup>11)</sup>と自分の立場を明らかにしている。

### (2) 心実学の特徴と現代的展開

では心実学の特徴とはどのようなものであろうか。森は1)内容の具体的実践性、2)学問的領域の多元性、3)表現の易簡性に要約できるとする。そしてその究極的淵源は、わが国の「島国性」に依拠する。それ故にこそ、民族における学問的伝統が形成されるゆえんだとも述べている<sup>12)</sup>。

ただ森は古来の「心学」及び「実学」の単なる反芻的解釈を是とするのではなく、心学的精神ないし実学的精神を、現代の学問形態において、表現し展開する。森の「心実学」の現代的展開についてみてみよう。

#### 1) 内容の具体的実践性

学問が学問<sup>13)</sup>であるためには「理法の統一」が重視されるのは当然である。ただ理法は、事実の中に内包せられているものであるから、極言すれば理

法は無量の「事実の結晶的象徴」ともいえる。ところがわが国の現時の学問界では、理法と称せられるものも、その背後に事実を予想しない単なる概念の場合も少なくない。それは結局、学者自身が事実の中から引き出したものではなく、多くは他の書物より借りて来たものである。原の事実、あるいは自分自身の原体験に還元して把握しなければならないのにそれが為されていないのが、学問が現実界に対して真の威力を発揮しない理由である<sup>14)</sup>。

同時に学界における根本的欠陥は、1つの事象に対して、たとえ分析は精緻をきわめても、それに対する対策が示されていない場合がほとんどである。真の学問は当面の事象の分析に留まらず、問題の解決に対しても、若干のヒントが提示されなければならない。その典範を「心実学」の中に見出すことができる。それはその形態が素朴易簡であることと同時に、学問的志向の根本に、そのようなものが内包せられてるからである<sup>15)</sup>。

このように学問は具体的な実践へつながり、さらに必ず問題への対策ないし解決策を含まなければならないという森の主張に、「心実学」の精神の、現代における新たな展開の1つの特徴をみることができる。

## 2) 学問領域の多元性

森によれば、学問的対象の割拠的縄張りが強すぎる。わが国で哲学者と称せられる人々も、いわゆる狭義の「哲学的領域」内に閉じこもり、倫理学、美学、教育学等の諸領域を対象としない。他方、西欧の哲学者、特にプラグマチストの代表的哲学者と呼ばれるデュウイー<sup>16)</sup>は哲学及び教育学の他に、倫理学、美学、また宗教論等も執筆している。プラグマチストは翻訳すれば「実学者」である。実学たる心実学が現代的展開をする時、多元的な対象について論究するのは当然のことだとする<sup>17)</sup>。事実、森の晩年の『哲学五部作』には『即物論的世界観』、『歴史の形而上学』等の他に『宗教的世界』、『人倫的世界』さらに『日本文化論』も加えられている。

## 3) 表現の易簡性

これは、表現が分かりやすいこと、啓発性が求められるということである。専門家に対しても、また専門家でない人々にも、例え内容が難しくても、伝わる必要がある。それこそが心実学の現代的展開として大切な要点であるという。ところで、わが国における一学問領域における表現は、その領域における専門家に辛うじて理解されるにとどまっている。多領域の専門家はもちろん、場合によっては同一領域でさえ理解しがたい場合がある。一つの専門領域における学問的成果—少なくともそれが広義の人文社会科学に属する限り—他の専門領域の人々にも理解されるものでなければならない。これができないのは、広く現実の世界を大観せず、専門領域の縄張りに囚われ、ひとり高しとしているためだ<sup>18)</sup>。実学たる学問は誰にもわかることが大切である。要は学問がどこまでよくこなれている否かが、中心眼目である。心実学は、「徳川時代の代表的な学問としての儒教及び仏教の精髓を、最もよくこなした人々によって生み出された、独自の学問的傾向」<sup>19)</sup>である。その現代的展開はこの特質をしっかり受け継ぐ必要があると森は強調する。

## (3) 全一学への道

森は「哲学という学問は、いかに乏しくても、自分自身の世界観人生観を打ち建てなければ意味がない」、「その点が他の学問とは根本的に違う」。そのためには「何よりもまず自己の主体を立てなければならない」、「同時にその背後というか根底には、民族主体ともいうべきものの確立が必要」<sup>20)</sup>。だからこそ「真の思想は凡て現在自分の置かれている却下の現実から出発する他ないと考えるようになった」<sup>21)</sup>。ところが現在の「哲学という学問はギリシアのプラトン及びアリストテレスにその端を発して、その後西洋の中世を通過して近世に入り、カントというような超凡な大哲学者を排出し、その後フィテ・シェリング・ヘーゲルなどを通してハイデッカーとかヤスパースなどに到った滔々たる西洋哲学史上の思想

的大流が頭に浮かんできてならぬ<sup>22)</sup>。しかし東洋の天地には古来世界観人生観の学はあった。例えばインドには仏教、また色々な哲学思想、中国には儒教、老荘といった独自の思想の流れはある。特に仏教は、インドに端を発して、中国を経てわが国に伝わり、現在ではむしろわが国に最も盛んになった。東西の接触や交渉が以前と比較にならないほど頻繁となり実質的な地域規模が狭くなり、従来考えていた世界観・人生観も変化せざるを得なくなっている。このような状況下、西洋的で観念的匂いのする「哲学」というコトバは使いたくなくなってきた<sup>23)</sup>。「単なる西洋哲学の紹介や解説ではなくて、乏しいながらも、何とかしてこの自分の内部に宿っている、日本人としてのいのちに内在している世界観構造と人生観構造とが、一つに融合したものを究明したい<sup>24)</sup>。その思いが全一学の提唱となる。

#### (4) 全一学とは

森は続けていう。「人類の歴史上、西洋と東洋という二種の異質な文化が、今後次第に歩み寄りざるを得ない。その場合そうした東西の哲学思想の切り結ぶ切点を考える学問は、無色透明の新たな名称が必要であり、全一学は希求する方向と合致する名称である。全一学という学問は、勿論現に存在している学問ではなく、今後無量の人々によって創られてゆかなければならない<sup>25)</sup>とした上で、その特質として次のような点を挙げている。

##### 1) 大観

全一学の根本性格は、世界観と人生観の新たな統一の学でなければならない。それは西洋哲学以上に広大でなければならぬとする。例えば、この現実界において栄枯盛衰あるいは興亡起伏というような絶対不可避の事実に関しても、その理を明らかにする必要がある。確かに西洋哲学史上でもヘーゲルは歴史を問題にしたが、ヘーゲルの最大の関心事は結局論理であり、生きた歴史的現実ではなかった。

この点、中国大陸で生育した哲理の最大のものは「易」であるが、そこには人間界を支配する「極大

にして同時に極小」な絶対的真理として、栄枯盛衰の大法がある。それは西洋哲学における個人による限定を超えた無量の民衆の内奥深く潜んでいる人類的叡知の象徴的開示があり、その叡知が千万無量の経験を通して検証されつつ、次第に積み上げられ組織建てられてきた人間的叡知の動的体系である。従ってそれはある意味で思想的限定以前の「大法」であると述べ<sup>26)</sup>、全一学によって立つべき立場を明らかにしている。

##### 2) 広範性

全一学は「人間各自が一個の哲学」の実現を目指している。従って世界観的希求と人生観的希求もつ人で、ひと通りの教養をもつ人なら一応理解可能な学問でなければならない。なぜなら西洋哲学の場合、自然科学を生み出した合理的知性を根本とする西欧人種が、そうした知性のいわば極限的発揮を試みたとみてもいい。普通の教養人のみならず、専門家自身にも理解し難い場合がある<sup>27)</sup>。これでは何のための学問かわからない。必要なのは生きた学問である。「自分が現在まで経験してきた多様な人生経験の内包している生きた真理の断片や教訓など、自分なりに統一する上に、与って力あるような体系的知見をもつ一個の生きた全一的叡知といふべきものこそ、わたくしがここに提唱しようとする『全一学』というものに他ならない。」<sup>28)</sup>

##### 3) 円相

全一学は世界観と人生観の統一した学である以上、全一体系が求められるが、そこには一種の「円相」が内具されてなければならないという。なぜなら「真にいのちの本質を体認した『全一学』の表現は、一方からは学問的表現としての必然的制約として、一種の体系的表現でありながら、しかもそこに漂う『生』の趣は、いのちの本来相たる円現の相を帯びる」は当然と<sup>29)</sup>述べ、その趣は「たとえば葉末の露に宿る月影も、大海に宿る月影も、ひとしくこれ月影であるように、真の『全一学』にあつては、体系の全相自身が一大円相を描くと共に、さらにそれぞれの部分章節自身も、また、何らかの程度にお

いて一種円現の趣を帯びるべきだといえる』<sup>30)</sup> としている。そこには実在生命の重々無尽蔵性を開顕した大乘仏教中の理論構造の最高峰とせられる華嚴教と同一の哲理を感じる。

#### 4) 論理と直感

全一学の表現にあたっては、もちろん「理」の体系性は重要であるが、形式論理の形式に囚われて、いのちの展開様式の上で、無力性に陥らないことが必要である<sup>31)</sup>。

また全一学の方法論にあたっては、「全一学の根本が、思索者自身のいのちの自証への努力である限り、論理を主とする西欧的哲学的なそれだけでは不十分である。」<sup>32)</sup> 『全一学』にあつては『書籍』よりも『現実』を重視するということである。しかも現実の中心は各自のいのちそのものである以上、そこで重視せられねばならぬのは、いわゆる論理ではなくていのちとその自証でなければならない<sup>32)</sup>。かくして「『全一学』の学問的方法としては、ある意味では論理以上に直感が重視せられなくてはなるまい。しかしこの場合『直感』というは、ふつうに西洋哲学で『直感』と呼んでいるものとは異なり、いわば仏教で『大円鏡智』と名付けるような高大深遠な叡智をもってその理想とすべきであろう。即ちそれは、形式論理を超出するはもとより、全宇宙法界の本質的構造を、一瞬にして撰めるような絶大なる内観的叡知が要とせらるわけである。」<sup>33)</sup>

#### 5) 現実界の最下の基盤面の重視

さらに森は現実界の最下の基盤面の重視を強調する。従来の西洋の哲学者の多くは、「霞でも吸っている人でもあるかのように」、自分の周りの「現実界の人と物については、何ら知ることがなく」、「例え関心を向けていても自己の一道を歩き通すだけの光と力」が得られない<sup>34)</sup>。これに対して全一学では「一方からはこの錯雑極まりない現実社会のもつ根本性格を大観して、その本質を洞察徹見しつつ、他面自己を圍繞している身辺の人と物との動的関連、並びにそこに作用している諸もろの理を透察徹見して、それへの対応を誤らないことが肝要」<sup>35)</sup>だとする。

## おわりに

以上森の学問的特徴を民族の伝統に立った心実学の現代的展開として捉え、その到達として全一学の提唱となった経緯とその特質を出来る限り、森の言葉を引用して示してきた。なぜならば全一学は個人が持つべき学問体系であり、森には森の生命が躍動する言葉がある。その躍動を少しでも伝えられたらという思いからである。

的外れを恐れず、筆者なりにまとめれば、森の学問は世界観と人生観が統一された全一の学問体系である。そしてそれは民族の伝統・心実学を受け継ぎつつ、現代における展開をしている。そして世界を大観するとともに現実世界にしっかり足を置き、生かされ生きる命を感じつつ、腰骨をしっかり立て主体的に自己の実在を検証し、具体的実践へと導くものである。

次稿において全一学五部作、とりわけその中核となる『創造の形而上学』を中心に論をすすめたい。

## 注

- 1) 森信三「全一学とは何か」『森信三全集(続篇)第七巻』実践人の家、昭和59年3月、3ページ
- 2) 同上、3ページ
- 3) 山田修平「森信三の全一学と実践(1)」『鳥取短期大学研究紀要』第62号、鳥取短期大学、2010年12月
- 4) 森信三「わたくしの学問的系譜」『森信三全集第五巻』実践社、昭和42年3月、563ページ
- 5) 同上、564ページ
- 6) 二宮尊徳(1787-1865)江戸時代後期に「報徳思想」を唱えて、「報徳仕法」と呼ばれる農村復興政策を指導した農政家、思想家。
- 7) 前掲「わたくしの学問的系譜」564ページ
- 8) 中江藤樹(1600-1684)江戸前期の儒者。古来「近江聖人」と讃えられた日本の思想家。士籍を捨て酒舗を営みつつ学問修道に励む一方、庶民教化に



- 生涯を捧げる。主著に「翁問答」,「鑑草」がある。
- 9) 熊沢蕃山(1619-1691) 中江藤樹から陽明学を学ぶ。政治的学問的手腕が評価され、岡山藩の番頭を勤めた。番山の納国策は、藩民への儒教の普及から軍事面の充実、治山治水等の農業土木に至るまで、国政全般に及んだ。
- 10) 前掲「わたくしの学問的系譜」565 ページ
- 11) 同上, 565 ページ参照
- 12) 同上, 566 ページ参照
- 13) ここで森のいう「学問」とは哲学と解してよいであろう。
- 14) 前掲「わたくしの学問的系譜」568 ページ参照
- 15) 同上, 568-569 ページ参照
- 16) John Dewey(1859-1952) アメリカの20世紀前半を代表する哲学者, 教育改革者, 社会思想家。パース, ジェームスとならんでプラグマティズムを代表する思想家。
- 17) 前掲, 「わたくしの学問的系譜」570 ページ参照
- 18) 同上 570-571 ページ参照
- 19) 同上 572 ページ
- 20) 森信三「全一学にたどりつくまで」『森信三全集(続篇)第一巻』実践人の家, 昭和58年3月, 502 ページ参照
- 21) 同上, 504 ページ
- 22) 同上, 518 ページ
- 23) 同上, 519 ページ参照
- 24) 同上, 520 ページ
- 25) 同上, 524-527 ページ参照
- 26) 同上, 526-527 ページ参照
- 27) 同上, 527-528 ページ参照
- 28) 同上, 528 ページ
- 29) 同上, 531 ページ
- 30) 同上, 532 ページ
- 31) 同上, 532 ページ参照  
寺田清一編『森信三先生 全一学ノート』実践人の家, 昭和54年3月, 12-13 ページ参照
- 32) 『森信三先生 全一学ノート』13 ページ参照
- 33) 同上, 15 ページ
- 34) 前掲「全一学にたどりつくまで」533-534 ページ
- 35) 同上, 534 ページ